

## 平成 30 (2018) 年度 大妻女子大学卒業式 学長式辞

本日、大妻女子大学を卒業される 1959 名の皆さん、ご卒業まことにおめでとうございます。大妻女子大学の教職員一同とともに、皆さんに心よりお祝いを申し上げます。また、長い間、お嬢様方の本学での勉学をお支えいただきましたご家族や関係者の皆さまにも、お礼とお祝いを申し上げます。

皆さんの 4 年間ないし 2 年間の学生生活はどうだったでしょうか。大妻女子大で過ごした日々を思い出してください。皆さんは、大学にどのような思いや期待、あるいは夢を抱いていたでしょうか。現在、その思いは叶えられたでしょうか。あるいは、全く違った思いや夢を持つようになったでしょうか。

本年度、本学院は、創立 110 周年を迎えました。校舎には 110 周年の記念ロゴが飾られ、アリアドネの糸と戯れる白い猫が皆さんを迎えてきました。この 110 周年を記念して、この 1 年間千代田校舎、多摩校舎それぞれにおいて、40 を超えるさまざまな事業が、あるものは全学事業として、また、あるものはセンターや付属機関の事業として、また、あるものは学部事業として行われてきました。

コタカの生きた時代展の開催をはじめ、7 月、9 月、12 月と連続して開催されたこれからの女性の学び方や働き方を考えるシンポジウム、外部講師を招いての千代田・多摩での 11 回にわたる人文学連続講演会、イギリスから著名オルガニストを招いてのパイプオルガン・コンサート、金井宇宙飛行士を招いての講演、作家の温又柔さん、作家・映画監督の川村元気さんを招いての講演、DeNA 中畑野球監督・瀬古陸上監督を招いてのトーク・イベント、オリンピック・トーチの展示と各国大使館による連続トークなどを実施しました。また、今年の秋からは、本学院の先生方の執筆による大妻ブックレットの刊行も始まります。これらの多くの事業、なかでも、各学部が実施した記念事業は、それぞれの学部の専門教育と結びついたものが多く、ここに列席されている卒業生の皆さんにとっても、意義あるものになったのではないのでしょうか。

110 年前の 1908 年は、本学院の創立者大妻コタカが、裁縫・手芸の私塾を開いた年です。日露戦争が終わって数年の時です。日露戦争は、司馬遼太郎が『坂の上の雲』で描いているように、日本の実力から言ってやや無理な戦争でした。このため、コタカが私塾を開いたこの時期は日露戦後不況と呼ばれる不況のさなかにありました。にもかかわらず、あるいは、そうであるからこそ、コタカは、女性が職業を身に付け、家族や社会を支える一員となることの大事さを強く認識したといえるでしょう。

すなわち、コタカは、それまでの「エリート」でもなく、「中流以上の女子」でもなく、社会の中で何ら特別でない、ごくごく普通の女性が「社会的に自立するとはどういうことか」を考え続けて、大妻技芸学校の設立を決意したのです。戦前の日本は現在よりもはるかに、階級的格差の強い社会、男女差別の強い社会でした。女性には選挙権がなく、家制度も男子長子相続制でした。女性が社会の中で自分自身を確立することははるかに困難だったのです。そうした状況の中、コタカは「女性の自立」のための独自の戦い方を、女性が社会に受け入れられやすい手芸・裁縫といった「技芸を身に付ける」ことから始めようとしたのです。本学院は、創立以来「女性の自立のための女子一貫教育」を建学の精神としていますが、その「自立」の根源には、こうした若き日の大妻コタカの独自の考え方と強い意思があったということができるといえるでしょう。

こうした観点から、7月には、高橋裕子津田塾大学学長をお招きして、「女子大学の可能性と未来への展望を拓く」というシンポジウム、9月には、Will Hutton Hertford College, Oxford 学長、蟻川芳子日本女子大学前理事長・学長、Alison Beale Oxford 大学日本事務所代表とともに「世界の中の日本—これからの女子教育」というシンポジウム、12月には、南砂読売新聞常務取締役、村木厚子元厚生労働事務次官、屋敷和子 JAL スカイ社長とともに「コタカの理念を实践する女たち—『男女雇用機会均等法』以前から社会で貢献した『良き職業人』、家族三世代を継ぐ『良き家庭人』』というシンポジウムを連続的に開催して、これからの女子大のあり方、女性の生き方を改めて考えました。

これらのシンポジウムで確認したことは、この20年間に、女性をめぐる社会環境が緩やかにではあれ大きく変化したことです。「ガラスの天井」がまったく無くなったかといえどそうではありませんし、古い男女観もまだまだ残っています。しかし、日本の女性就業構造の特徴とされたM型雇用は、今、急速に解消しています。学校を出てから定年まで働き続ける女性が増えています。ただし、この裏面には、非正規雇用が2000万人を超え、その多くが女性であるという状況があります。シンポジウムで確認した基本線は、学び続け、働き続けることのできる主体としての女性を育てることが喫緊の課題となっているということでした。広く世に知られる本学院の校訓「恥を知れ」も、自己規律の言葉、自分自身を鍛えていく言葉であると同時に、さまざまな人間関係のなかで自らの位置を確定し、ひとに共感する能力を培う言葉として位置付けていくということを再確認しました。

ワークライフ・バランス、あるいはワークライフ・インテグレーションを正面から考え、実践していくことが求められています。「自らの意思によって働き又は働こうとする女性が、その思いを叶えることができる社会、ひいては、男女がともに、多様な生き方、働き方を実現でき、ゆとりがある豊かで活力あふれる社会の実現を図ること」、女性たちが、「精神

的自立」を前提とした「人間的自立」を確保していくこと、そのための具体的・実践的な教育が求められていることを、シンポジウムでの討論からひしひしと感じました。

「女性の自立」は、まずは、性差による差別を克服するような自立といえるでしょうが、目指してほしいのはその先です。「女性の自立」が「人間としての自立」であること、自己の尊厳を守る形での自立であること、すなわち「経済的自立」は、あくまで「精神的自立」を前提としたものであること、こうした自立を皆さんに追求して行ってほしいのです。

そして、願わくは、そうした自立が、他の人々への強い共感に支えられたものであってほしいと思います。他人の喜びを自分の喜びとし、他人の悲しみを自分の悲しみとし、他人の怒りを自分の怒りとできるよう、望みます。そして、これこそが、コタカ（心）の精神、コタカ（心）の望んだ生き方であったと思います。

これから、皆さんが社会に旅立つと、うれしいこと、楽しいこととともに、悲しいことやつらいことが、きっとおきてきます。そうしたときは、いつでも大学を訪ねてください。皆さんの母校は、皆さんの悩みや願いを、いつでも聞き入れ、少しでも力になれるよう努力します。

皆さんが、今後、多様な場で活躍されることを心から期待して、卒業のお祝いの言葉としたいと思います。

ご卒業おめでとうございます。

2019年3月26日

大妻女子大学長 **伊藤正直**